

第4章

ニコラ・テスラの未踏科学

ニコラ・テスラは晩年どうしていたのだろうか？

研究はどうなったのか？

これについては、新戸雅章氏の本が非常に詳しい*¹。この本によれば、ニコラ・テスラの晩年の研究は、以下のようなものである。

1. タービン
2. レーダー
3. U ボート撃墜法
4. 誘導ミサイル
5. 空飛ぶストーブ (垂直離陸機)
6. 殺人光線

こうしたニコラ・テスラの特許は、彼の遺産として、米軍および

*¹ 新戸雅章著「超人ニコラ・テスラ」(筑摩書房, 1993年). 新戸雅章著「知られざる天才ニコラ・テスラ」(平凡社, 2015年).

RCA などが秘密裏に研究した軍事研究に繋がった。残念ながら、新戸雅章氏の本には反重力の研究のことはない。

しかし、こうしたアイデアは単に SF マガジン用のネタだと見られたのだ。なぜなら、ニコラ・テスラが長らくマッド・サイエンティストと見なされたからだ。しかしながら、実際にこうしたアイデアは米国特許として発案され取得されたのである。

ところが、第一次世界大戦、それに続いて、第二次世界大戦が起こった。そのために、ニコラ・テスラの特許は完全に米軍および米政府の監督下で管理されることになったのだ。なぜなら、第二次世界大戦前には、ソ連やナチス・ドイツからたくさんのスパイがアメリカに来ていたからだ。その代表的なものが、フォン・ブラウンだった。

彼はニコラ・テスラの反重力研究を全米でくまなく探したのだ。そして、それを理解し、ドイツに帰国後、ナチスの円盤製作に協力したのだ^{*2}。

そういう諸事情の中で、ニコラ・テスラは、研究所も設立できない。研究できない。資金援助も得られない。特許も取得できない。あとは、SF 作家やジャーナリストに自分が特許を取りたかったアイデアを提供することになった。こうして、さまざまな SF 雑誌や商業雑誌にニコラ・テスラのアイデアが残されることになったのだ。

^{*2} William Lyne, *Occult Ether Physics: Tesla's hidden space propulsion and the conspiracy to conceal it*, 4th ed., (Creation Productions, NM, 2012 年 2 月 14 日.) この拙訳は私の HP に掲載中。ウィリアム・ライン著 (井口和基訳)「オカルト・エーテル物理学/テスラの隠された空間推進システムとそれを葬った陰謀」, 2020 年. <http://www.stannet.ne.jp/kazumoto/LyneOEP4.pdf>.

この章では、こうしたニコラ・テスラの未踏科学を考えよう。まずは、新戸雅章氏の本にあるような、ちまたで書かれているニコラ・テスラの未踏科学のことを見ていこう。そして、後半で本当の未踏科学を見ていく。要するに、最初に表の一般人の知ること、後半に裏の米軍で研究されたことを見ていくのだ。

4.1 タービン

テスラ・タービンを知っているだろうか？

ニコラ・テスラは、ウォーデンクリフの研究所が破壊されてから、精神的に落ち込んだ。しかし、この悲壮な時期に再び蒸気タービンの研究を始めるのだ。

実は、彼は子供の頃から、水流ポンプやガスポンプのような回転体に関心があった。そこから回転磁場の問題に進み、回転モーターの研究に進んだわけだ。だから、おそらく子供の頃に考えたことが頭によぎったのだろう。そうして、気を取り直して発明されたもの、それがテスラ・タービンである。

この特許が以下のものだ。

これは、中央のシャフトに10数枚の金属板が並んだ回転円盤が取り付けられている。この金属板に高速流体を外部から注入すると、流体力学的粘性のせいで円盤が回転するというものだ。これは当時の技術で実にうまく実現できた。性能は従来のタービンをはるかにしのいだのだ。しかし、残念ながら、支援者が現れず、商業的には成功しなかった。この流体タービンを使い、発電を行う。ニコラ・テスラはこれを考えた。

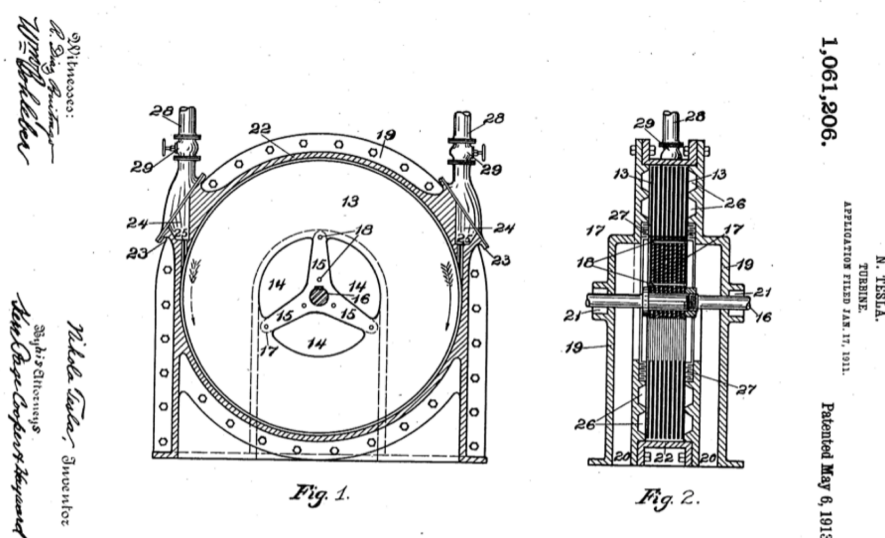


図 4.1 テスラ・タービン

【US Patent 1061206A】 May 6, 1913.

<https://patentimages.storage.googleapis.com/97/2c/df/6f9d46acc4fb80/US1061206.pdf>

4.2 レーダー

レーダーは第2次世界大戦中に日米で開発された。特に東北帝国大学の八木秀治博士^{*3}が世界最高のアンテナである八木アンテナ^{*4}を発明したのだ。

しかし、我が国では旧日本軍の大本営がその価値を正しく認識できなかった。一方、英米側は最も重要な軍事技術だと考えた。それで、いち早く八木アンテナを集中的に研究したのだ。そして独自の

^{*3} やぎ ひでつぐ、1886年（明治19年）1月28日 - 1976年（昭和51年）1月19日

^{*4} 八木アンテナ

改良型の最新のレーダーアンテナを発明した。

その差がミッドウェー海戦の勝負に現れとことは有名な歴史だ。日本軍は双眼鏡による目視だった。だから、雲の中は見えない。しかし、米軍はレーダーで見たため、はるか遠くの雲の中も見通すことができた。

このレーダーは、ヘルツ波を四方八方で放射してターゲットに当て、レーダーアンテナで回収する。だから、反射を受信するアンテナは常に360度回転する。それを船内のモニターで見るわけだ。

これは、コウモリが長音波を放ち、それを大きな耳で聴くのも同じ原理と言える。あるいは、海中のイルカやクジラが低周波の大音響や超音波を発し、その反射を脳で受けるというようなものである。

しかしながら、ニコラ・テスラのレーダーは、第3章のテスラ・コイルのところで見たように、共振によるものだ。空間全体に超高周波超高電圧のフィールドを作っておく。その中へターゲットが侵入すると、空間の静電容量が局所的に変化し、全体の共振周波数が変化する。すると、自動的に超高周波超高電圧の発信源から、そのターゲットに向けてテスラ波（誘導縦波）の放電が起こる。この放電は見えない。しかし、ターゲットと発信源の双方から同時にテスラ波が来るために、定在波を生み出す。この定在波の位置をモニターすることで、ターゲットの場所がわかる。そういう原理だったと推測されるのだ。

むろん、このフィールドはその内部にある物体にエネルギーを送るものでもある。だから友軍の航空機へエネルギーを送ることもできるわけだ。

そう、つまり、巨大なプラズマボールのようなものだ (図 4.4)。

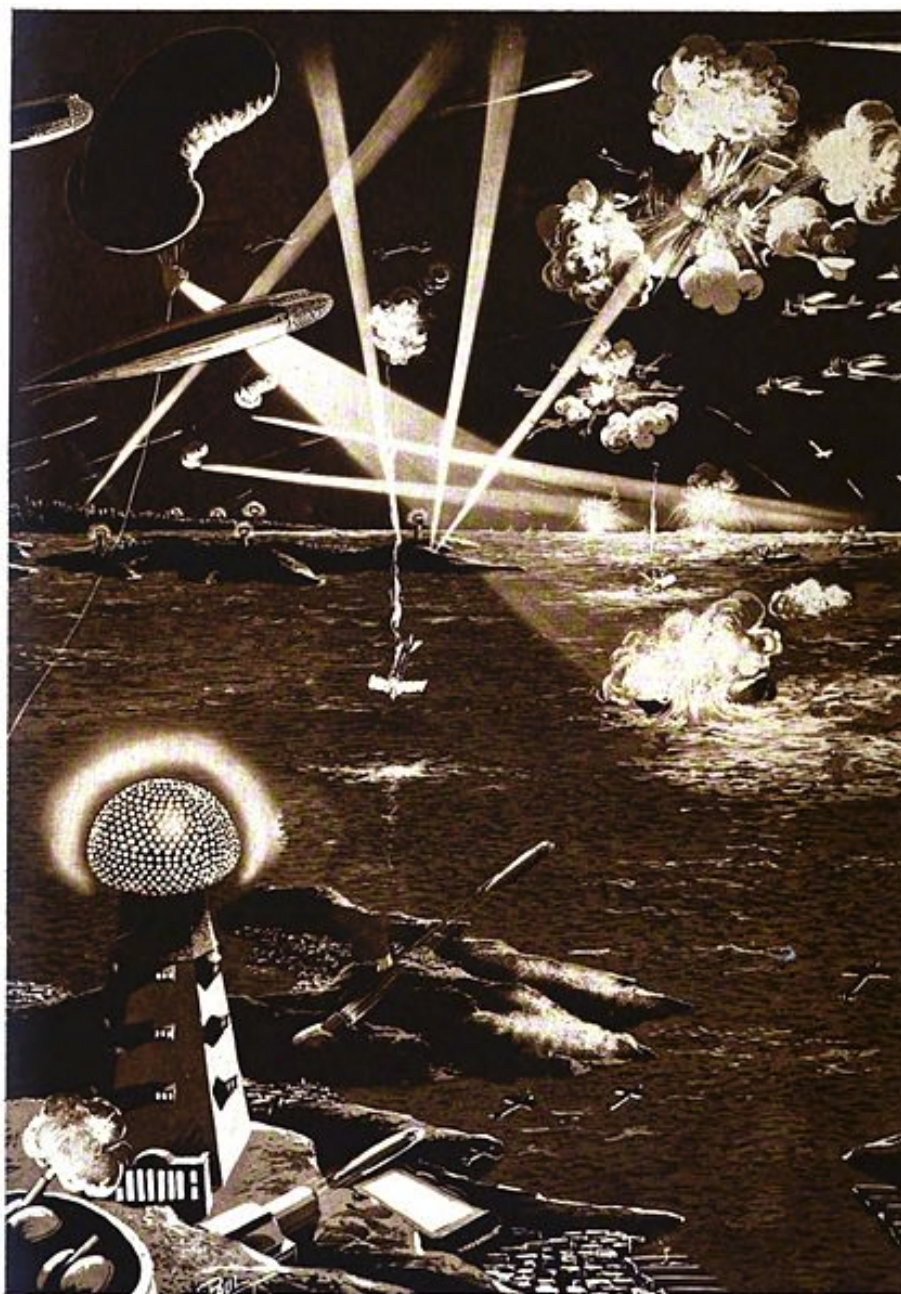


図 4.2 レーダーとパワーサプライ
SF 作家フランク・R・パウルが描いた未来の戦争の想像図
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Science_and_Invention_Feb_1922_pg912_-_War_of_the_Future.jpg

これを防衛する領域に作っておく。そうすれば、その領域はフィールドで守られることになる。

4.3 U-ボート撃退法

一方、海中ならどうだろうか？

もしこれを海中で実現できれば、敵の潜水艦や未知の物体などの海中ターゲットを発見することもできるわけだ。自艦から敵潜水艦にテスラ波の定在波が赤ん坊のヘソの緒のように結びつく。一度結びついたら二度と離れない。こうして、そのヘソの緒の片割れを手繰れば敵の位置が常に分かるのだ。

テスラはこう言っている*5。

もし、毎秒数百万サイクルの超高周波で電氣的に振動させられた極微の電荷の流れを包含する集中した光線を射出し、たとえば潜水艦の船体に反射させたあとでこの光線を遮り、それを同一の艦船か別の艦船上の蛍光スクリーンに (X 線に似た方法で) 映し出すことができれば、そのとき隠れた潜水艦の位置を定めるという問題を解決できるだろう。

しかしながら、いま現在では、クジラの超音波を用いたソナーでしかない。これは超音波の放射と反射でターゲットを見つける方法だ。電磁波のレーダーを音波のソナーに変えただけである。これは、米海軍のものが世界最高である。正式名称は、「低周波アクティブ方式探索曳航アレイ・ソナーシステム (L F A S)」という

*5 新戸雅章著「超人ニコラ・テスラ」(筑摩書房, 1993年). 249ページ.

ものだ。



図 4.3 フェイズド・アレイ・レーダー

<https://ja.wikipedia.org/wiki/フェーズドアレイレーダー>

現在一般化しているレーダーは、フェイズド・アレイ・レーダーというものである。これはレーダーを正方形や円状にたくさんのレーダー群を配列するタイプのものだ。これは一個のレーダーでは電波が球状に放射されるだけだ。しかし、アレイを作ると、ホイヘンスの原理で電波が重なり合う。その結果、電波が一方向へ並行に送受信できるようになる。

いまの原子力潜水艦のものはこれがソナーになったものだ。しかしながら、そのパワーはとてつもない。周波数は数百から数キロヘルツ。水中で最高音圧となり、音源は何やら「アポロ」で有名な「サターン5型ロケット」並みの“240デシベル”を超える音を発する。数百km先でも140デシベルを維持し、反射音は即座に人工

衛星を介して本国のスーパーコンピュータに送られて解析される。

その結果、ひとたびこれを発すると、前方にいるクジラやイルカが一気に脳を破壊されて死んでしまうのだ*6。海岸に何百頭もクジラやイルカが打ち上がるのはこれが理由だ。そえゆえ、すでにたくさんの訴訟問題が起きている。



図 4.4 イルカの大量死
「ジャースクでイルカが再び謎の大量死」2007年10月27日付 am-e Jam 紙
http://www.el.tufs.ac.jp/prmeis/html/pc/News20071029_121115.html

*6 「ジャースクでイルカが再び謎の大量死」2007年10月27日付 am-e Jam 紙;
http://www.el.tufs.ac.jp/prmeis/html/pc/News20071029_121115.html

パワーを上げないと遠くまで行かない。これが放射の原理の欠点だ。一方、ニコラ・テスラの共振では、それほどパワーを上げなくてもはるか遠方まで伝わる。これが、横波輻射波のヘルツ波と縦波共振波のテスラ波の違いなのだ。

ところで、米原潜はソナーデータを本国のスーパーコンピュータへ逐次瞬時に送らなければならない。それには上空に電波の反射材が大事になる。実はそれが毎日のように米海軍の飛行機が上空にアルミ入りのケムトレイルを撒き続ける最大の理由なのだ。さもなくば、せっかくの原潜の最新ソナーで解析不能になる。そうなれば、核ミサイル搭載の原潜は無用の長物になり、米防衛網が崩れる。米軍産複合体は、これを恐れているわけだ。



図 4.5 ケムトレイル

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ケムトレイル>

4.4 誘導ミサイル

ニコラ・テスラの誘導ミサイルとは何だろうか？

同じようなアイデアは、敵の航空機を破壊する場合にも使えるだろう。したがって、ニコラ・テスラは、空間に電磁フィールドを張っておけば、敵機を簡単に追撃できる。それを昔彼が発明したオートマトンやテレ・オートマトンを使い、ミサイルを打ち込めば良い。これが、テスラの誘導ミサイルだと考えられる。

このテレ・オートマトンは、いまで言えば、まさにドローン技術のことであった(図4.4)。無線コントロールマシンの意味である。

ニコラ・テスラはニューヨークの研究所時代に市民の前でこのドローン船の公開実験を行った。

そして、オートマトンはロボット技術のことだ。だから、ミサイル自体がロボットになれば、レーダーで発見されたターゲットをミサイル自体が追跡できる。こういう考え方を第2次世界大戦前にニューヨーク・タイムズ誌に披露していたのだ。

第2次世界大戦中に、敵機を追撃する理論は数学者のノーバート・ウィーナー博士が完成したものだ^{*7}。米軍は彼の理論の一部を用いて、航空機の追撃システムを構築したのだ。ニコラ・テスラはそれよりもはるかに先を言っていたことがわかるだろう。

4.5 殺人光線とテレフォース

晩年のニコラ・テスラは、特許と論文への公表の代わりに新聞へのアイデア提供を中心に行なうようになった。確かにこっちの方が手間暇がかからない。多少のお金も入るだろう。研究から排除され

^{*7} フロー・コンウェイ, ジム・ジーゲルマン著/松浦俊輔訳, 「情報時代の見えないヒーロー [ノーバート・ウィーナー伝]」(日経 BP, 2006年)

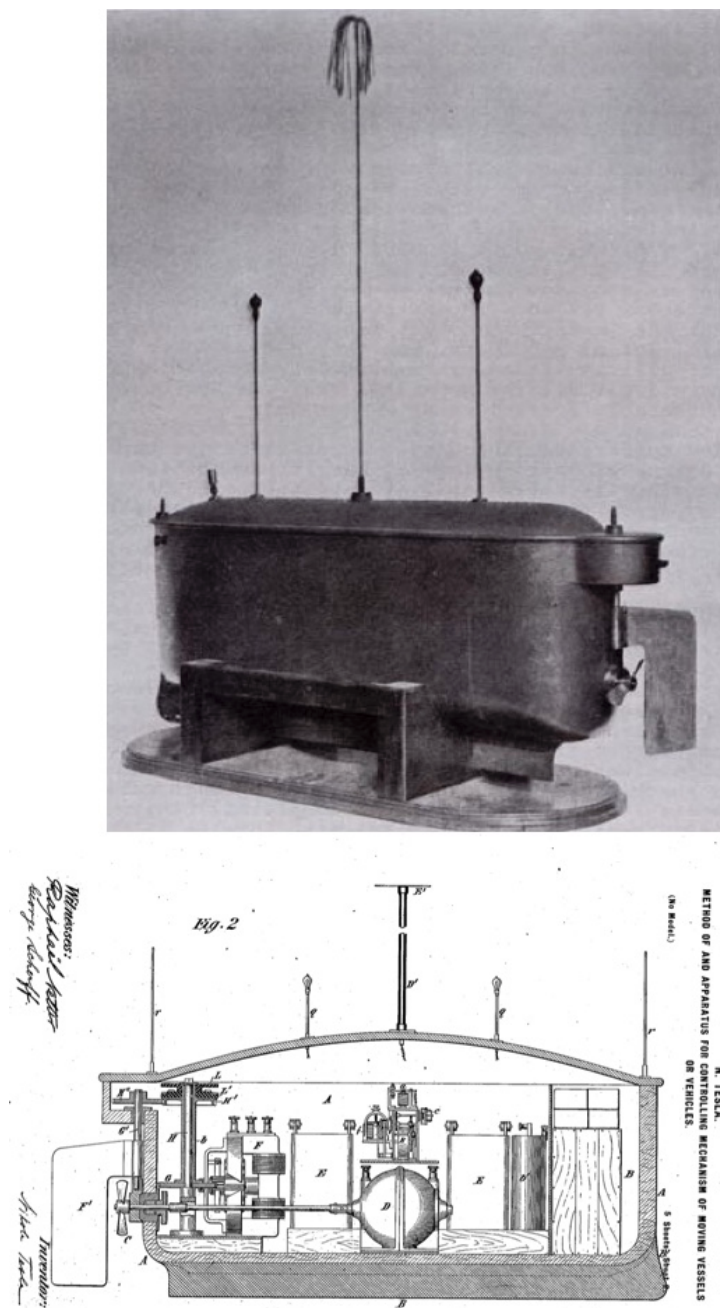


図 4.6 テレ・オートマートン
【US Patent 613809A】

<https://patents.google.com/patent/US613809A/en>

https://ja.m.wikipedia.org/wiki/ファイル:Tesla_boat1.jpg

た彼には渡りに船だったに違いない。彼は当時の新聞雑誌のコラムにさまざまなアイデアを SF ネタに提供したのだ。その中で、彼は殺人光線 (Death Ray) やテレフォース^{*8}という概念を紹介した。

最初のニコラ・テスラのデス・レイ (殺人光線) とは何なのか？

これは、ニコラ・テスラが1934年、死の10年ほど前にニューヨーク・タイムズの記事として公表したものだ。このアイデアには、テスラ・バルブというものが使われ、テスラ・フォースが誘起されるという兵器である。

ウィキペディアの解説は以下のようなものだ^{*9}。

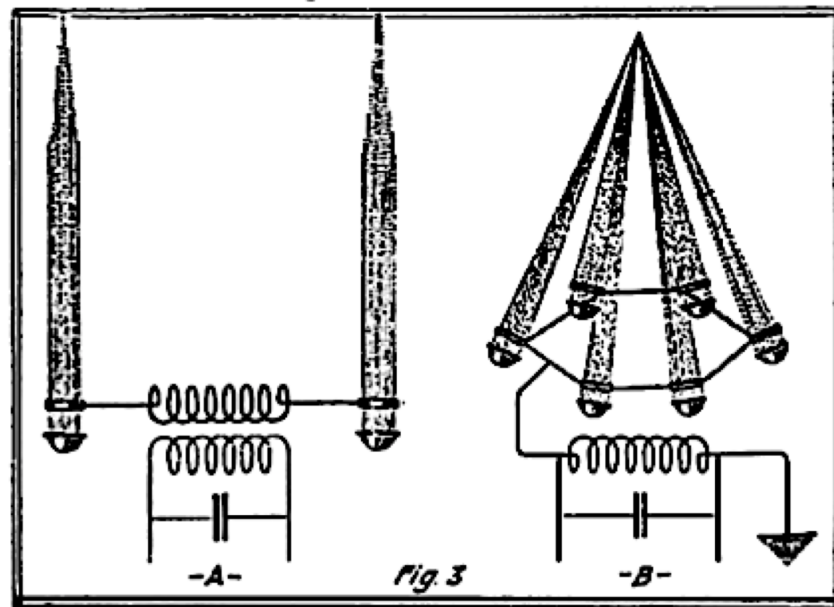
テスラ・フォースは、ニコラ・テスラによって提案された防御兵器である。これは、静電反発力によって真空チャンバー内でペレットまたは材料のスラグを高速に加速する。その弾頭を目的のターゲットに向けたノズルから発射するのだ。彼は、ヴァン・デ・グラフ起電機を研究した後、それを思いついたと主張した。テスラは、この武器を地上の歩兵に対して、または対空目的で使用できると説明した。

テスラ・フォースの要素は次のとおりだ。

1. これまでのように高真空ではなく、自由空気中でエネルギーの発現を生成するための装置。
2. ものすごい電気力を発生させるメカニズム。
3. 2番目のメカニズムによって発生する力を強化および増幅する手段。
4. ものすごい電気反発力を生み出す新しい方法。これは、

^{*8} <https://en.wikipedia.org/wiki/Teleforce>.

^{*9} <https://en.wikipedia.org/wiki/Teleforce>.



This illustration, from a July 11, 1934 *New York Times* article, shows several of the special solid aluminum Tesla bulbs which, as Tesla stated in 1940 (see page 27), no longer required vacuum. The current is placed on the beams by means of the ring-shaped electrodes near each bulb, fed with currents from the coils.

図 4.7 ニコラ・テスラの デスレイ (殺人光線)

この図 4.5 は 1934 年 7 月 11 日のニューヨーク・タイムズ紙の記事からのものだ。特殊な固体アルミから作られたテスラ・バルブがいくつか使われている。その後、ニコラ・テスラが 1940 年に述べたように (ニューヨーク・タイムズ誌 27 ページ)、これはもはや真空を必要としない。各バルブの近くの リング型電極によって、流れはビームを生み出す。電流はコイルから供給される。

William Lyne, *Occult Ether Physics: Tesla's "Ideal Flying Machine" and the Conspiracy to Conceal It*, (English Edition) Kindle 版 (Creatopia/Wm. Lyne; 第 4 版, 2012).

https://en.wikipedia.org/wiki/Death_ray

本発明のプロジェクターまたは銃である。

荷電粒子は「ガス集束」によって自己集束する。

この考え方は、第二次大戦後の素粒子物理学の粒子加速器と同じ原理だと考えられるのだ。特に、ヴァン・デ・グラフ粒子加速器の原理に近い。

しかしながら、これは、図から明らかなように、基本骨格はテスラ拡大送信機 (TMT) である。それで金属リングに高電圧を提供し、高電荷をチャージする。そうすれば、金属から放電し、飛び出したイオン電子がリングを突き抜けて飛び出す仕組みだ。これがテスラ・フォースなのだ。

1940年、ニコラ・テスラは、各ステーションの費用が2,000,000ドル以下で、数か月で建設できると見積もっている。テスラの死後、ジョン・G・トランプ^{*10}は、テスラの「殺人光線」装置の一部が入っているとされる箱の中に45年経ったディケードボックスを見つけた。

ところで、ディケードボックスとは何か？

電子回路のプロトタイプでは、ディケードボックスは、特定の受動部品のさまざまな値の交換を単一の可変出力に置き換えるために使用できるテスト機器の一種だ。抵抗、静電容量、およびインダクタンス用にディケードボックスが作成される。一連のそれぞれの成分全体で入力と出力の接点を切り替えることにより、値を段階的に増やすことができる。これらのデバイスのインターフェイスは通常、ダイヤルまたは調整可能なテープカウンターで構成され、回路

^{*10} ところで、このジョン・G・トランプこそ、ドナルド・トランプ元米大統領の叔父である。

内で外部電源なしで動作する。そういう装置である。

4.6 空飛ぶ機械 (垂直離陸機)

ニコラ・テスラの空飛ぶ機械とはどのようなものなのか？

ニコラ・テスラは、幼少の頃から空を飛ぶことに関心があった。実際、第2章のニコラ・テスラ物語でみたとおりだ。彼は中古の傘で二階から空を飛ぼうとジャンプし、落下して大怪我を負った。幸い彼は骨折などの怪我だけですんでよかった。しかし、普通の身体能力の人間なら即死だっただろう。

そんなわけで、ニコラ・テスラは、大人になっても航空法には大きな関心を持っていたのだ。晩年、表の世界では自分のこれまでの研究ができなくなり、空飛ぶ機械の特許を取得していた。それが以下のようなものである。

これはあくまで表の世界の話である。なぜなら、プロペラ機だからだ。これは空気中の流体力学の効果を用いた飛行原理にすぎないからだ。

実際にはニコラ・テスラの最大の関心は電磁推進にあった。こういう特許やアイデアを書き残した文献はすべて米軍に撤収された。なぜなら、第2章にあるように、当時は度重なる戦争の時代だった。だから、ロシア人やドイツ人の軍事スパイが全米に潜伏していたからだ。そうやって、くまなく最先端の電気工学技術を探していたのだ。

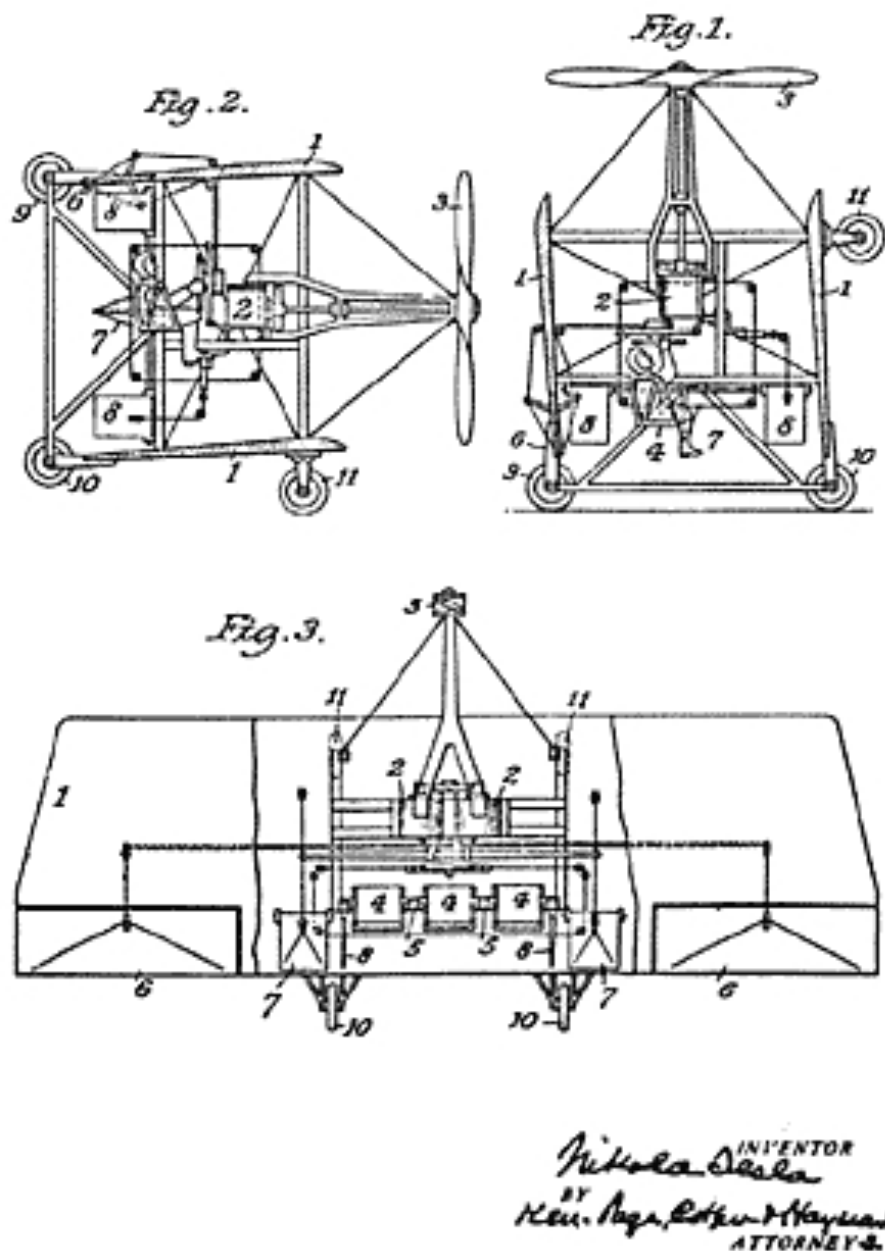


図 4.8 空 飛 ぶ 機 械 (垂 直 離 陸 機)

【US 特 許 1655113】

航空輸送法 (Method of aerial transportation)

<https://patents.google.com/patent/US1655113A/en>

4.7 高周波医療機器

4.7.1 ジアルテミーとハイパーサミア

ニコラ・テスラは、かなり初期に電磁波で健康を増進することを発見したのだ。テスラ・コイルを用いてさまざまな物質の共振を研究していくうちに、そうした生物への効果を見つけたのだ。初期には交流発電機を発明した。この交流の周波数との共振現象を研究したのである。1890年頃のことだ。この頃に発見した現象が、「高周波交流の熱効果」というものだ^{*11}。

たとえば、銭湯にいくとたまにあるだろう。たくさんの浴槽の1つに高周波電流の流れた浴槽がある。中に入ると、肩の凝った場所や腰痛の箇所を当てると、ビリビリきてマッサージされる。こういう現象をジアルテミーという。

一方、高周波が人体を温める。彼は、こういう熱効果のあるものも見つけたのだ。こういう現象をハイパーサミアという。ガン細胞は熱に弱い。だから、高周波でガン細胞の熱を上げることで死滅させる。ニコラ・テスラがこういった高周波療法を最初に発見したのだった。

^{*11} 新戸雅章著「超人ニコラ・テスラ」(筑摩書房, 1993年). 122ページ.

4.7.2 ウィリヘルム・ライヒ博士のオルゴン・エネルギー

ところが、この療法の進歩は更に進んでいく。アメリカにはニコラ・テスラ亡き後の時代に、ウィリヘルム・ライヒ博士^{*12}が登場する。ライヒ博士は1940年にアメリカへ移住する。そこでオルゴン・エネルギーを研究し始めるのだ。ニコラ・テスラが長らくマッド・サイエンティストと見られてきた。このような時代には、このオルゴンエネルギーもマッドなオカルト話だと一笑に付されてきたのだ。そんなことはありえないと。

なぜなら、19世紀にマックスウェルが電磁波(電波)と可視光が同一の横波であることを証明した。さらにヘルツが電波を送受信できる道を切り開いたのだ。この観点からすると、オルゴン・エネルギーは存在し得ないことになってしまう。しかしながら、テスラ波同様にオルゴン・エネルギーが縦波の共振波の場合には必ずしもそういう理由はなくなるのだ。

実際、エリック・ドラード博士によれば、次元解析からすると、通常の電磁場のエネルギーの単位は、質量を m 、長さを l 、時間を t として、

$$E_{\parallel} = m \frac{l^2}{t^2} \quad (4.1)$$

で与えられる。これは物質のエネルギーである。

一方、ライヒ博士のエネルギーはこの単位にはない。このエネル

^{*12} Wilhelm Reich、1897 年 3 月 24 日 - 1957 年 11 月 3 日。
<https://ja.wikipedia.org/wiki/ヴィルヘルム・ライヒ>

ギーライクは

$$E_{\perp} = \frac{l^3}{t^2}, \quad m \equiv l \quad (4.2)$$

と書かれる。この種の非物質化したエネルギーは、交流電流システムでだけ生じる反応性または消耗のないエネルギーであるというのだ^{*13}。

彼は次のように書いている。

この非物質化されたエネルギーは、交流システムで発生する反応性エネルギー、つまりワットレスエネルギーの空間的な類似物である。テスラ拡大送信機 (TMT) を取り囲む誘電体媒体の誘電飽和（絶縁破壊）によって生じるプラズマ放電は、もはやそれらの力学的法則に関連するものではなく、エネルギーの自発的生成やゴードンの比率のような有機的成長の法則に関連するものである。これらの現象は、ウィルヘルム・ライヒ博士が提唱した「宇宙の重ね合わせ」の理論を体験的に検証したものであることは、特に興味深い。

誘電体であるエネルギー・トランスと、磁性体であるカップリング・トランスの間のエネルギーの脈動は、共振コイルとは独立した、また地球とは独立した、追加の定在波を表している。この新しい定在波は電気振動と呼ばれ、時間の次元での定在波を表している。この定在波のエネルギーは、図 7(図 4.29) に模式的に示すように、カップリング・トランスを介して屈折し、もう一方の定在波とエネルギーを交換する。

^{*13} Eric Dollard, *Theory of Wireless Power, Wireless Engineer, 1986.*

TMT の動作には 3 つの異なる定在波が含まれており、それぞれが 2 つの屈折点を介して他の定在波と結合していることがわかる。これらの定在波は、それぞれが異なる次元の側面を表している。

- 1) 地球波：空間次元
- 2) インタートランス：時間次元
- 3) 共振コイル；超次元

音楽表現における類似の関係は

- 1) ハーモニー；空間的次元
- 2) リズム；時間次元
- 3) メロディ；超次元

この 3 重共鳴、つまり 6 重エネルギーの過渡応答^{*14}が子音共鳴で動作するためには、6 つのエネルギーの間に共役関係が存在しなければならない。残念ながら、2 倍以上のエネルギーの過渡応答に関する理論的な知識はほとんど存在しない。これは主に、2 次以上の微分方程式の解に関する代数学の理解が限られているためである。

^{*14} transient, トランジェント

4.8 共振とは何か？

ここでの議論で大事なことはなんだろうか？

もう一度これを思い出そう。これは輻射ないし放射と、共振ないし共鳴である。

マックスウェルの電波、ヘルツ波、および可視光は、横波の輻射ないし放射である。つまり、これはラディエーションだ。むろん、量子力学のプランク輻射は光子の放射である。こういうものは、一箇所から四方八方へ飛び散る現象だ。

実際、輻射 (や放射) はお風呂の湯気のようなものだ。湯気が飛び散ることでお風呂の熱が冷める。これと同様に、輻射 (や放射) で系のエネルギーが減る。つまり、ワットがかかる。電力消費するわけだ。

一方、テスラ波およびライヒ波は縦波の共振 (あるいは共鳴) である。つまり、これはレゾナンスだ。こういうものは、四方八方から一箇所に集まる現象だ。

簡単な物理の問題にもあるように、共振現象 (や共鳴現象) は、システムが共振 (および共鳴) により外部からエネルギーを獲得する現象である。橋が軍隊の行進で崩壊するのは、軍隊のリズムと橋の固有振動数が一致するからだ。この場合、橋は軍隊行進から過剰のエネルギーを吸収するのだ。この差は大きい。

放射の量子が光子であるなら、共振の量子は存在するのだろうか？

いうまでもなく、これまでの普通の科学の考えなら、輻射 (や放射) の反対のプロセスは存在する。それが共鳴 (と吸収) である。ア

ブソープションだ。光子は放射されてまた吸収される。放射と吸収は同じ現象の時間の向きが反対の逆過程に過ぎない。だから、放射で失ったエネルギーは吸収でまた同じ量のエネルギーしか来ない。電波は輻射されてまた共鳴される。輻射と共鳴は同じ現象の時間の向きが反対の逆過程に過ぎない。だから、輻射で失ったエネルギーは共鳴でまた同じ量のエネルギーしか来ない。したがって、この普通の物理学では、共振と共鳴は同じレゾナンスにすぎない。つまり、吸収という意味を共振と共鳴で別に言っているだけだ。これでは、フリーエネルギー、あるいは、オーバーユニティーは存在し得ない。

しかしながら、共振や共鳴とは異なる側面がある。たとえば、軍隊の行進で橋が壊れる場合を考えて見よう。

はたして軍隊の行進に必要な全エネルギーと橋がもともとあった時の全体のエネルギーの総和と、軍隊の行進による共振の結果、橋が崩壊したエネルギーとの総和は同じだろうか？

もしこれらが同じなら、軍隊は同じエネルギーを使えば、行進しなくても破壊活動で橋を同じように壊せるだろうか？

橋を破壊で壊す場合は非常に作業にエントロピーが増える。つまり、乱雑な活動になる。作業の時間もかかるだろう。しかし、共振で破壊する場合は、ほとんど「一瞬」だろう。しかも、連動して見事に破壊できる。

つまり、エリック・ドラード博士が何を言わんとしたか？

これは、通常の共鳴現象の理論は数学的には単に2次の微分方程式の問題になる。しかし、それだけではすまない高次の非線形の現象が、この共鳴に含まれているということだ。つまり、言い換えれば、共振現象は、単なる吸収放射の問題だけでは終わらないという

ことなのだ。

一つの例がある。それが光子 (フォトン) の自然放出という現象である。これはアルベルト・アインシュタインが発見した現象である。光子は1個が励起される場合は1個でもそれが元へ戻るときにはもう1個仲間を引き連れて現れる。つまり、1個の光子を励起すると元へ落ちる時2個になるのだ。これがレーザーやメーザーの原理である。

これは、光子に限った話ではなく、一般にボーズ粒子という特殊な素粒子に成り立つ。しかしながら、これが非線形効果であることは明らかだろう。

何度でも強調しよう。光子は横波の量子だ。

一方、テスラ波は誘導共振波の縦波である。これはシステムの一部を振動させるのではない。これはシステム全体を共振させて振動させるのだ。だから、共振周波数がきわめて大事になるわけだ。

ところで、日本語の意味合いとすると、輻射と放射は多少異なる。輻射は漢字の語源からすると、一箇所から四方八方へ飛び散る現象になる。ところが、放射は必ずしも四方八方ではなく一方向でも問題なさそうだ。

同様に、これらの逆転の言葉としては、輻射の反対は集中だろう。たくさんのが一点に集まる現象をいう。一方、放射の反対は吸収だろう。吸収はたった1個のものが吸収される場合でも良さそうだ。

したがって、輻射集中、放射吸収と対にするのが良いのかもしれない。また、共振や共鳴はシステム全体の振動や振動数をイメージできる。一方、集中や吸収はシステムの一部のローカルなものをイメージする。いずれにしてもこの辺は日本語英語のいずれにおいて

も混乱は避けがたい。

4.9 人工地震兵器 (Artificial Earthquake Weapon)

ニコラ・テスラはニューヨークにいた頃、小型の地震兵器を生み出した。それが、テスラ振動子というものである。

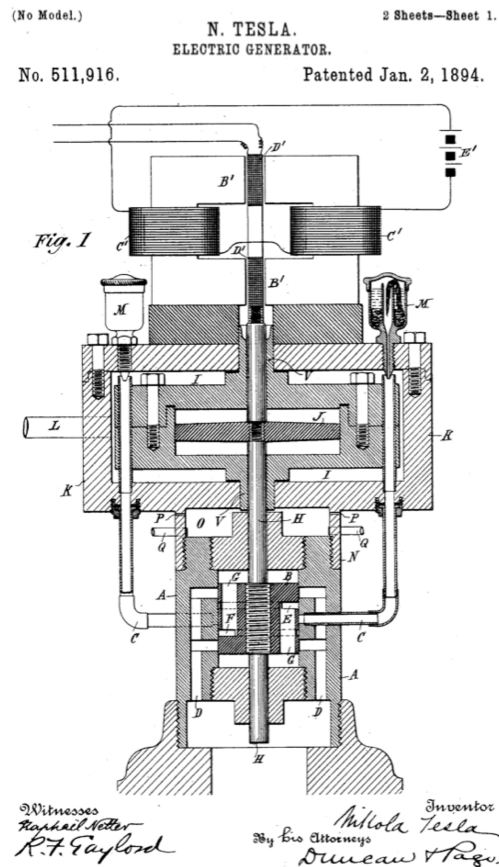


図 4.9 テ ス ラ 振 動 子.

【US Patent 511,916A】 Jan. 2, 1894.

<https://patents.google.com/patent/US511916A/en>

この装置には、中央部に蒸気エンジン、上部の電磁誘導装置、下部に力学振動子がある。まず蒸気エンジンが上下振動を起こす。上部の電磁誘導装置で発電できる。同時にその振動で下部の力学振動子が振動する。ところが、力学振動子が地面を振動させることで地震を起こす。地面の振動の周波数により、建物の固有振動数と共振すると、建物が崩壊してしまうのだ。そういう機械である。

いま現在も、工事現場でビルの壁に穴を開けるような場合、似たような装置でドンドン打つ。すると、その周波数が低周波の場合、それがビルの壁を伝わる。中にいる我々にもその低周波振動が伝わり、かなり不調になることがある。

ニコラ・テスラはこの共振現象を力学的なものから電磁学的なものを作る。そういう意味で考えたのが、拡大送信機 (TMT) であったのだ。

4.10 電磁波兵器 (HAARP)

1980年代、これが電磁的に行われる道が開かれた。これがバーナード・イーストランド (Bernard Eastlund) の特許である。米海軍は、これを秘密裏に研究するためにアラスカのオーロラ研究プロジェクトとして開始したのだ。正式名称は、High Frequency Active Auroral Research Program、「高周波数活性オーロラ研究プログラム」である。

これが1990年代以降、人工地震の秘密裏の実現が行われたのだ。こうして、我が国には、東日本大震災の時にこれが初めて使わ

U.S. Patent Aug. 11, 1987 Sheet 1 of 3 4,686,605

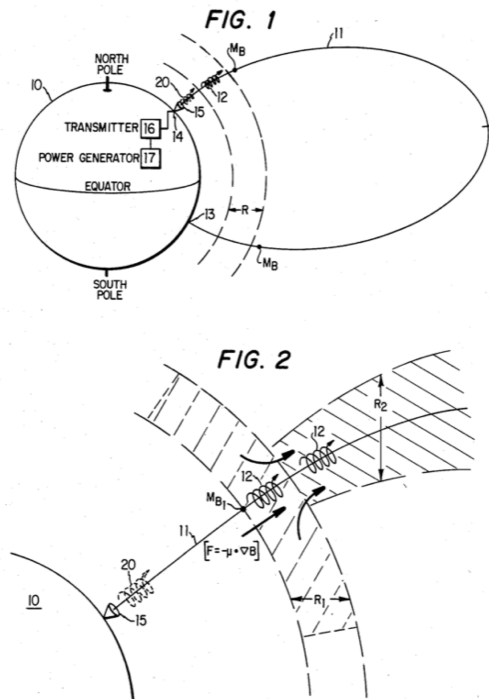


図 4.10 バーナード・イーストランドの HAARP 特許.
 【US Patent 4686605A】 Aug. 11, 1984.
 地球の大気、電離層、および/または磁気圏の領域を変更するための
 方法と装置 (Method and apparatus for altering a region in
 the earth's atmosphere, ionosphere, and/or magnetosphere)
<https://patents.google.com/patent/US4686605A/en>

れた^{*15}。

^{*15} 井口和基著「ニコラ・テスラが本当に伝えたかった宇宙の超しくみ (下) 地震予測と UFO 飛行原理のファイナルアンサー」(ヒカルランド, 2013年)。

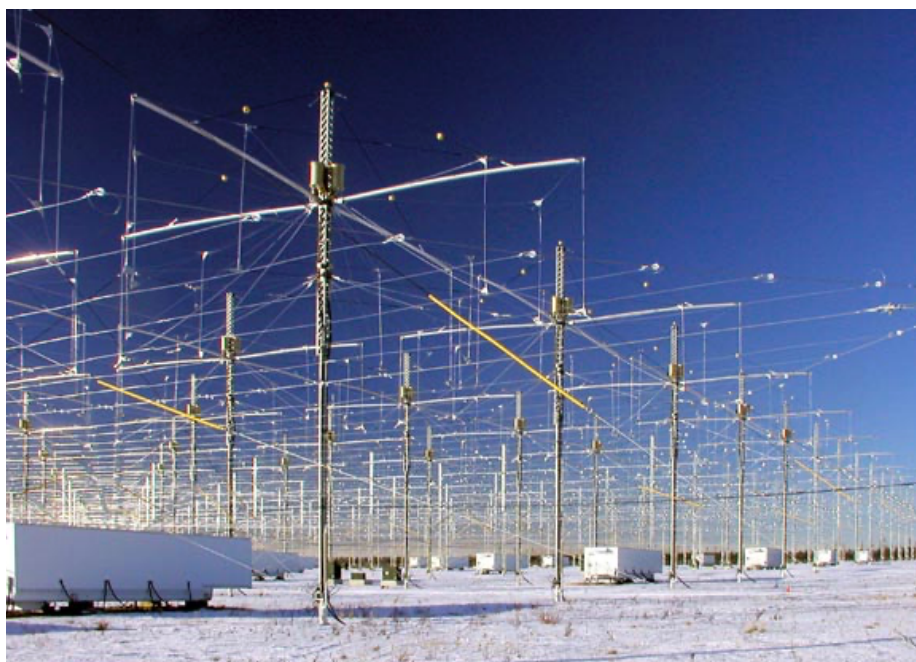


図 4.11 アラスカの HAARP 研究所.
<https://haarp.gi.alaska.edu>
<https://ja.wikipedia.org/wiki/高周波活性オーロラ調査プログラム>

4.11 ニコラ・テスラ探求

4.11.1 オカルト・SF の時代

こうした一件 SF ネタのようなアイデアは、格好の SF 雑誌やオカルト雑誌のテーマになった。そして、それが SF やオカルトのファンの刺激になり、ニコラ・テスラがマッド・サイエンティストの代名詞になっていく。次々に奇想天外で奇抜なアイデアに読者は刺激されたのだ。そうして、アメリカのサイエンスフィクションと

ジャンルが定着し、世界に広がったのだ。もちろん、我が国へも到達する。これがのちのちハリウッドへも波及していくのだ。こうして、SF やオカルトは映画でも最高のネタになった。ドル箱路線になったのだ。

4.11.2 虎穴に入らずんば虎子を得ず

そんなわけで、ニコラ・テスラを研究する場合、最初はオカルトや SF の無駄骨に終わるかもしれない可能性に出会う。それでも、オカルトや SF 自体は面白いからいいや、というようなところから入る。そうして、1つ1つを丹念に掘り起こしていく^{*16}。そうすると、いやいやニコラ・テスラは実にまともな科学者だった。そういうことが徐々にわかってくるということなのだ。同様の意見は、新戸雅章氏の本などにも書かれている^{*17*18}。

4.11.3 インターネットの登場

ところで、我が国のインターネットは1996年に誕生した。アメリカはほぼ10年の1980年代に早く訪れた。むろん日本の大企業や大学にはアメリカとほぼ同時か、せいぜい数年遅れで実現していた。なぜなら、インターネットとは、もともと世界の理論物理

^{*16} R. A. Ford, *Tesla Coil Secrets Contribution Notes and Novel Uses*, (Lindsay Publishing, Inc., Bradley, 1985).

^{*17} 新戸雅章著「超人ニコラ・テスラ」(筑摩書房, 1993年). 新戸雅章著「知られざる天才ニコラ・テスラ」(平凡社, 2015年).

^{*18} 横山信夫・加藤整弘監修「フリーエネルギーへの挑戦」(たま出版, 1992年).

学者や数学者が、お互いのプレプリントを郵送以外の方法で送ることを目指して生み出したものだからだ。普通、理論物理学者は大学や大企業や国立研究所にしかいない。だから、インターネットは最初はこういった公的機関にしか存在しなかったのだ。それが、1996年秋頃にやっと我々一般人も使えるようになったのだ。

その頃、私は一度ニコラ・特斯拉という謎の人物を研究してみた。そう思ったのだ。それで、ニコラ・特斯拉まわりの情報を探していたが、日本国内では書籍も文献も皆無だった。あったとしても、物理の教科書の強磁場の単位の特斯拉(=1万ガウス)とか、そういう程度の情報しか見当たらなかったのだ。物理の教科書に立派に単位として特斯拉の名前が載っているにもかかわらずだ。もっとも我が国にはスタインメッツの名前も存在しなかった。むろん、交流理論は電気工学の初等的な教科書には必ず載っているのに、その創始者が知られていないのだ。

そこで今度は海外の英語サイトを当たってみた。すると、結構出回っていた。2000年頃を境にYouTubeにもさまざまのニコラ・特斯拉の動画が作られるようになった。ところが、その大半はニコラ・特斯拉はマッド・サイエンティストだったというわけだ。つまり、ネット時代の初期には、ニコラ・特斯拉の有用な情報はなかった。

ところが、ある時期から、妙にニコラ・特斯拉の詳しい情報が出回るようになってきたのだ。そして、少しずつ海外の英語サイトにニコラ・特斯拉という人物がどのような人物だったのか？ そういう姿がおぼろげながらに見えてきたのだ。

本当のニコラ・特斯拉はアルベルト・アインシュタイン以上の研究者だった。エジソンと特斯拉、加えてスタインメッツの3人は

ノーベル賞に値する偉大な科学者だった。テスラの科学的概念はいまだに組み尽くすことが出来ない。我々の知らない、かつて捨て去られた概念に基づいていた。そして、それこそフリーエネルギーや空飛ぶ円盤の基本になり得るのだ。そういうことが少しずつ理解できるようになったのだ。おそらく、我が国の大半のフリーエネルギーの研究者全般に同じような体験があるものと思われる。

世界一アメリカがネット開始が早かった。我が国より少なくとも10年早い。日本人は10年先に行っていたアメリカからの情報からニコラ・テスラ的话题を引っ張ってきたはずである。そしてそういうものを見てから、各自が研究を行った。これが我が国の姿だったと思う。

4.12 特許数の謎

さて、この場合にかなり不思議なことが起こった。

その不思議なことは何だったと思うだろうか？

実は私が最初にネットでニコラ・テスラの怪しい話を見ていった頃、私は丹念に彼の発明を調べていった。すると、ニコラ・テスラの特許数は数千を超える。そこまでは行かないまでも、当時は1500ほどあると言われていたのだ。そういう記憶が私の頭に残っている。私はそういう記憶は余り忘れない。

ところが、最近この本を執筆するにあたり、もう一度きちんとニコラ・テスラの特許を整理したいと思ったのだ。それで注意深く調べ直すと、ニコラ・テスラの特許数が確実に減っていたのだ。いまはニコラ・テスラが生涯に獲得した特許数は300ちょうどだということになっている。いまのネット情報では、しばらく前はニコ

ラ・テスラの特許数は700ほどあったが、それが300になったというような記述も見かける。

いったいこれはどうしたことなのか？

結論から言うと、おそらく最初にニコラ・テスラはたくさんの特許を取得した。そのうち、非常に米政府および米軍にとって危険なものあるいは知られたくないものは表の特許制度の記録から抹消され、裏に秘匿された。そういうことになる。

はたしてそんなことがあり得るのだろうか？

答えはイエス。ありえる。

例えば、これを見てみて欲しい。

【US 特許 645675】(US Patent 645,675)である。これは第4章でリストアップしたものにある。【078.US 特許 645,675】電気エネルギー伝達システム-1900年3月20日【平面螺旋テスラ・コイル無線送電の基本特許】

これをいまネット検索で「US Patent 645,675」で打ち込む。

この高電圧発生装置は、ニコラ・テスラの上述の特許と全く同日に申請され、同日に認可されたことになっているのだ！つまり、ニコラ・テスラの【1900年3月20日】の特許【US 特許 645,675】が、いつの間にかE・トムソンの別の特許【US 特許 645,675】に変えられていたわけだ。

おそらくこういうふうな差し替え、あるいは、登記そのものを削除する。こういうふうなさまざまのやり方で、知られたくないアイデアの重要な特許が消されたものと考えられるのだ。

一般に特許はアイデア勝負だ。とにかく新規なアイデアが優先される。だから、その内容が物理法則に反している場合でも特許は取得できる。しかもアメリカの場合は、長らく「発明主義」で来たの

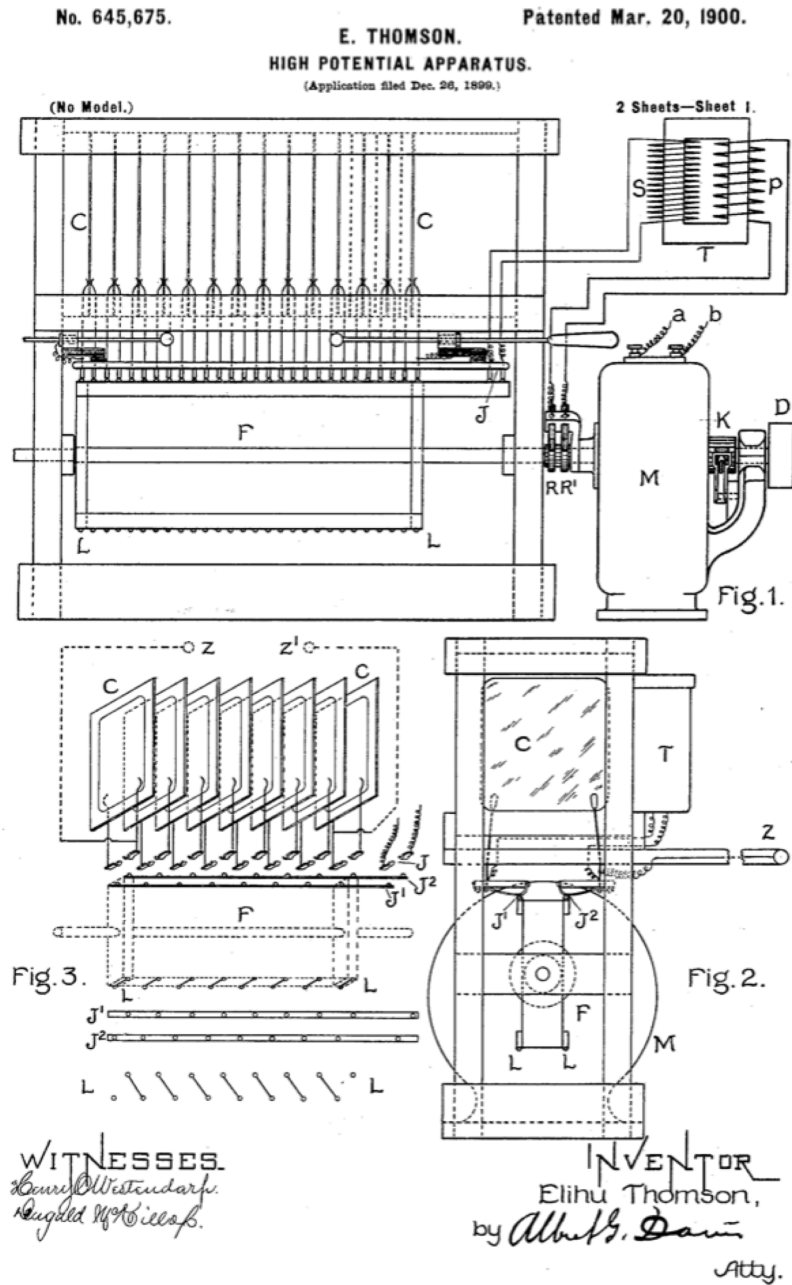


図 4.12 E・トムソンの高電圧装置. 1900年3月20日
E. THOMSON. HIGH POTENTIAL
APPARATUS. Mar. 20, 1900
<https://patentimages.storage.googleapis.com/ab/0b/45/8afa93e90c21d9/US645675.pdf>

だ。アメリカは、とにかく誰が一番最初にそのアイデアを出したか、が優先される国として有名だった。

一方、欧州や我が国の場合は、先願主義で来た。これは、アイデアの言い出しっぺはともかく、誰が一番最初に出願したか、が優先される国として有名だった。出願日の早さで優劣が決まるスタイルの特許制度のことだ。比較的最近になってようやく、アメリカの特許制度がこの出願主義に変わったのだ。

だから、アイデアの発案者はニコラ・テスラなら、だれが出願してもニコラ・テスラのものだったはずなのだ。それが、別の人物の特許に変わっているということなどありえない現象ということなのだ。

B・ウィリアム・カールソン博士の「テスラ」の本を読みしてみよう。すると、このカールソン博士はきつこう言いたいのだ。

「ニコラ・テスラの科学技術に秘密のものはなにもない」

あれほど「ニコラ・テスラの研究」には、まだ未知といわれてきたものがたくさん存在すると思われてきた。しかしながら、ニコラ・テスラの科学はこれまでの従来の電磁気学の範疇からまったく逸脱していない。彼は、そういうことを説明することが目的だったかのように見える。おそらく、彼はそのために書いた。それが表の科学のアカデミズムの巨塔、プリンストン大学のお役目さ！

それも当然だ。彼が研究し始めたときには、B・ウィリアム・カールソン博士の手に入る特許はすでに300しかなかったのだ。しかもいま現在のウィキペディアには100しかない。これらは100年以上かけて精査されつくした特許にちがいない。表に出しても問題ないと。だから、これからニコラ・テスラの研究をする人は、テスラ・モータースの研究者であろうがなかろうが、だれであろう

が、100程度の主要な特許からのみ研究するようにし向けられるのだ。

言い換えれば、初期のニコラ・テスラの特許には、テスラ波や電磁波の未知の現象や電磁推進力やフリーエネルギー発電の話がたくさん含まれていたはずだった。しかし、当時の物理学会ではそれらは理解不能だった。したがって、やむなく置き去りにされた。しかし後に RCA や米軍内部で100年をかけて研究するうちに、きわめて重要なものであることがわかる。こうして、大事なものは裏に隠した。これが隠蔽工作である。カバーアップだ。

こういったカバーアップされた科学技術はだれから隠されたのか？

むろん、最初は第一次世界大戦の対ロシア、次は第二次世界大戦の対ナチスドイツや対旧日本軍、そして戦後は対ソ連だっただろう。そして最近では対共産中国になったのかもしれない。あるいは、普通の表の科学分野だった可能性もある。

さすがにフリーエネルギーや反重力装置の特許を表に安易に出すことは出来なかっただろう。さもなくば、せっかく英ロスチャイルドや J・P・モルガンや米ロックフェラーが築き上げてきた一大企業コングロマリットの体系がもろくも崩れ去る。

こうして、ニコラ・テスラの研究の中で一番科学者として興味深い部分が見ること出来ずに終わったというわけだ。

さて、これからその秘密の科学も部分を読み解いていくことになる。それは反重力の研究である。つまり、これがあれば、フリーエネルギー発電も UFO も地球製を作ることが可能なのだ。これこそ、隠蔽されたニコラ・テスラの特許の中でも一番ユニークで興味深いものなのだ。これが第7章の話に繋がっていくのだ。